

## 第15回aacaサロン 現代の仏像と、その役割

会員増強委員会

開催日:2025年4月15日

話し手:佛師 江口泰観さん

モデレーター:大成建設 松本哲弥

会場:GALLERY ART HOUSE(東京・銀座)

江口泰観さんは、彫刻家の中でも特に仏像を専門につくる佛師というお仕事をされています。aacaの会員で、この職業の方は初めてではないかと思います。会員になられたのは2年ほど前ですが、その時からaacaサロンでのご自身の活動紹介をお願いしていました。そしてようやく実現した今回のサロンは、ご本人の個展会場で開催しました。

江口さんは19歳から仏像彫刻を学び、現在は京都市東山区に工房を構えて佛師としての活動をされています。全国のお寺や個人の方を中心に仏像を奉納しています。また、京都市内で仏像彫刻教室も主催されています。

サロンではまず、仏像の歴史と技法の変遷などについて解説をいただきました。

仏像は6世紀に朝鮮半島から日本へ伝来し、飛鳥時代の鑄造技法から奈良時代の乾漆造り、さらに香木を素材とした檀像彫刻から、平安時代に主流となっていく貞観彫刻へと変遷していきます。そして「仁和寺阿弥陀如来坐像」のような日本独特の美的感覚に根差した穏やかさを感じさせる和様化が根付いていったといいます。

平安時代後期には、「寄木造」や「木割法」が規格化・分業化の造仏手法として考案され、その技法も鎌倉時代の武士社会では、人体に即した量感を持たせる独自の手法へと進化。室町から江戸時代になると仏像が庶民化していき、佛師も職人化していったそうです。

このような、木彫が日本の仏像造りの本流となっていく過程や技法の進化・変遷などを、その時々 대표적인佛師やその作品事例を上げながら非常にわかり

やすく解説していただきました。

後半は、江口さん本人の制作手法と作品紹介です。現在制作中の「四天王像」で解説をしていただきました。

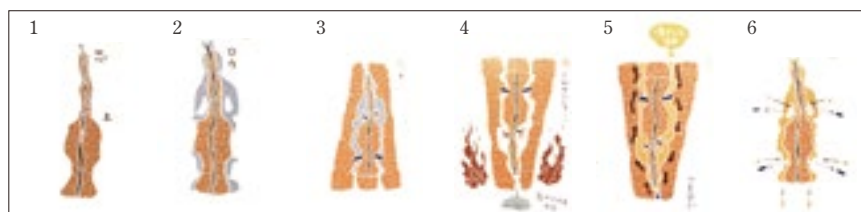
まず粘土像を作成し、その原型に合わせて寄木したものにグリッド線を引き、それを目安に荒彫りをする。次の「小造り」という段階で全体に満遍なく各部位を掘り進め、仕上げの段階では更に細部の装飾や模様などを彫り込みます。その際、150種類以上もの彫刻刀を使い分け、ヤスリなどは一切使わず、刃物だけで仕上げられるということに驚きを隠せませんでした。

最後に截金(きりかね)技法の仕上げをビデオで解説して頂いた後、個展会場の実作品を鑑賞しながらの質疑応答となり、皆さん活発な議論を交わしていました。

今回のaacaサロンは江口さんの仕事を通して私たちが日常あまり接することのない佛師という仕事を知る機会となりました。今後も本サロンでは、新入会員の方の活動や作品を紹介し、既会員の皆さんとの最初の交流の場として役割を果たして行きたいと思っています。皆様からも新入会員のご紹介をよろしくお願いいたします。(大成建設 松本哲弥)



左:仁和寺阿弥陀如来坐像 ホームページ『京都ミュージアム探訪』より 右:木割法の図解 太田古朴『仏像彫刻技法1 造像法 木割法』綜芸舎



鑄造技法の図解 山本勉『完本仏像のひみつ』絵:川口澄子, 朝日出版社, 2021年



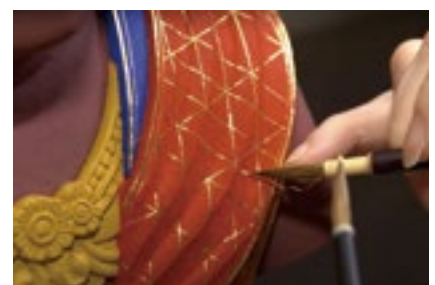
粘土像と寄木



左上:小造り 左下:仕上げ彫り 右:仕上がり



無数の彫刻刀



截金技法 YouTubeチャンネル『截金のいけ』截金師池田香那弥による制作動画より



個展鑑賞・質疑応答風景 写真右が江口さん